

## イグナティオス書簡におけるマタイ伝承\*

— 社会心理学的視点から —

山田耕太

### I

アンティオキアの司教イグナティオスが紀元二世紀初めに書いた七つの手紙は、新約聖書が書かれた地域や時代と一部重なり、イグナティオス書簡における新約聖書の神学思想的影響や、新約聖書からの引用箇所がしばしば論じられてきた。例えば、第二次世界大戦後では、R. ブルトマン、H. ラトケ、青野太潮、W. リベルが、イグナティオス書簡におけるパウロ思想の影響を論じ<sup>(1)</sup>、Ch. マウラー、H. ケスターが、イグナティオス書簡におけるヨハネ思想の影響を論じた<sup>(2)</sup>。しかし、最近ではイグナティオスとパウロ、イグナティオスとヨハネとの神学思想的影響から、イグナティオスと共観福音書、特にマタイによる福音書との関係に論争が広がりつつあるように思われる<sup>(3)</sup>。

イグナティオスとマタイとの関係について研究史的に回顧すると、19世紀から20世紀半ばまで、イグナティオスがマタイによる福音書を引用した、という伝統的な見解が疑われることはほとんどなかった<sup>(4)</sup>。ところが、1957年にH. ケスターが『使徒教父文書における共観福音書伝承』<sup>(5)</sup>を著わして、使徒教父文書における共観福音書からの引用と従来から考えられてきた箇所が、共観福音書が文書化される以前の共観福音書伝承という口頭伝承によることを論じて以来、研究状況が一変してきた。例えば、J. S. シピンガは、従来からマタイによる福音書からの引用とされてきた箇所が、マタイによる福音書からの引用ではなく、マタイによる福音書が文書化される際に用いられたマタイ特殊資料のイグナティオス版であり、イグナティオスはマタイによる福音書を知らなかったと結論づけた<sup>(6)</sup>。また、最近出版されたW. R. ショーデルのイグナティオス書簡注解書も、ケスターの見解に従って、イグナティオスがマタイによる福音書を読んで引用したのではなく、共観福音書伝承という口頭伝承によるという考えを支持している<sup>(7)</sup>。しかし、他方、イグナティオスがマタイによる福音書を読んで引用したという伝統的な見解も引き続いて見られる。例えば、B. M. メッツガーは新約聖書正典成立史に

関する最近の研究書の中で、イグナティオスはマタイによる福音書、ないしはそれに近い文書資料に基づいている、と表明している<sup>(8)</sup>。また、青野太潮は、マタイによる福音書を暗記して記しているのか、あるいは特定の福音書と直接に関係なく流布していた口頭伝承によっているのか、という二つの可能性を述べた後に、「ローマへの護送中という彼の具体的な状況を考慮すれば、暗記していたものからの引用、という方が事態に即しているように思われる」という見解を述べている<sup>(9)</sup>。

以下、本稿ではイグナティオス書簡において見られる、マタイによる福音書と平行する、言葉伝承を中心としたイエス伝承に絞って考察をしたい<sup>(10)</sup>。それらが共観福音書伝承という共観福音書が文書化される前から存在し、特定の福音書とは結びつかず広範囲に流布していたとされる口頭伝承によるのか。それとも、マタイによる福音書に由来するマタイ伝承によるのか。また、マタイ伝承と言っても、それらがマタイ福音書に纏わる口頭伝承によるのか。それとも文書化されたマタイによる福音書という文字伝承からの引用、ないしは記憶再現によるのか。これが本稿を巡る問題である。

## II

イグナティオス書簡においてマタイによる福音書からの引用と従来より考えられてきた箇所が、共観福音書伝承によるのか、マタイ伝承によるのか、あるいは口頭伝承によるのか、文字伝承の引用ないしはその記憶再現によるのか、と議論する余地があるのは、それらがマタイによる福音書と密接な関係があると指摘されつつも、一言一句違わない正確な引用ではなく、引用であると断言するのに「本当に説得的な証拠が全くない」(パウアー)<sup>(11)</sup>からである。そこで、より説得的に議論を進めるために、口頭伝承と文字伝承ないしその記憶再現の原理に関する本稿の方法論的立場を簡潔に論じたい。

共観福音書が文書化される以前の口頭伝承の段階における共観福音書伝承の果たす役割の重要性に注目したのは、20世紀初頭の様式史による研究であった。新約聖書学における様式史的研究の大家であるR. ブルトマンは、共観福音書における伝承素材と編集作業とを区別し、外典福音書、民話、民間伝承をモデルにして、共観福音書伝承という口頭伝承の発展する原理を考えた<sup>(12)</sup>。それによると、共観福音書伝承はいくつかの様式に分けられるが、それらは個々の断片的な伝承からより大きな伝承へ、すなわち単純な伝承からより複雑な伝承へと発展していく。ブル

トマンは次のように述べている。「ところでこうした物語が、口から口へ語り伝えられていく場合にも、あるいはまた作者が物語を他から採集してくる場合にも、その基本的特徴はおそらく依然として残存するが、その細部は想像力の支配にゆだねられ、ここかしこに明細化がほどこされる。」<sup>(13)</sup> 単純な伝承の方が複雑な伝承よりも原初の伝承に近いということのような原理に関しては、もう一人の様式史的研究の大家であるM. ディベリウスにおいても大きな違いはなかった<sup>(14)</sup>。

これらのドイツの様式史的研究に対して、編集史的研究の草分けであるH. キャドベリーは、人名、場所的表現、時間的表現などの具体的な表記が、伝承過程の後の段階で挿入されたというブルトマンらの立場とは違って、それらが伝承過程の始めの段階からあったものであり、しかも後の段階では失われやすいものだと考えた<sup>(15)</sup>。さらに、様式史的研究方法を受け入れたV. テイラーも、ブルトマンらとは対照的に、「口頭伝承は決定的に短縮される傾向がある」と主張した<sup>(16)</sup>。しかし、これらのアングロ・サクソン系の研究は、ドイツ系の様式史的研究の影響力の下で忘れ去られがちであった。

このような様式史的研究に対して、スカンディナヴィア系のH. リーゼンフェルトとB. ゲルハルトセンは、ラビの伝承をモデルにして福音書の背後にある口頭伝承を想定した<sup>(17)</sup>。しかし、共観福音書伝承を担った人々がラビの社会層とは違った一般の民衆であったこと、また、ラビが弟子達に聖伝を正確に記憶させたのと同じ原理で共観福音書伝承を想定すると、福音書間に見られる伝承の異同や変型が説明し難いことなどから、このモデルを受け入れることはできないと思われる。

その後、第二次世界大戦後に発展した編集史的研究においても、編集者である福音書記者が、継承した伝承素材に編集的加筆、修正、削除を施したという点においては、より単純な伝承からより複雑な伝承へと発展する、という様式史的研究の原理が保たれている。

さて、1970年代に入って、様式史や編集史という伝承史的研究とは別に、社会学や社会史を中心とした社会科学的研究成果を新約聖書学に導入する研究が盛んになってきた<sup>(18)</sup>。口頭伝承の研究に関しても、E. L. アーベルらは、社会心理学者のG. W. オールポートとL. J. ポストマンの噂の研究に基づいて、口頭伝承の原理を再吟味した<sup>(19)</sup>。オールポートとポストマンによると、噂の伝達過程では、次の三つの法則が支配する<sup>(20)</sup>。

(1) 基本的な伝達内容とは関係のない内容が短くなって要約される

平均化の法則。

(2) 基本的な伝達内容のあるモチーフが強められる強調の法則。

(3) 期待、感情、関心、偏見などによって、違った伝達内容が一つにされる同化の法則。

アーベルらはこれらの成果を取り入れて、口頭伝承では言葉の数が次第に少なくなり、内容が単純化されることを指摘した。こうして、口頭伝承では伝承過程で伝承が原理的に長くなる、というブルトマンやディベリウスの考えを社会心理学的な視点から鋭く批判し、キャドベリーやテイラーの考えが正しいことを裏づけた。さらに、このような噂の研究に基づいた新しい口頭伝承の原理が、無文字社会での口頭伝承の伝達過程を研究した文化人類学の成果とも一致することは注目に値する<sup>(21)</sup>。しかし、共観福音書伝承が現代社会における対人的、個人的コミュニケーション過程である噂の伝達過程に類似しているとは言え、古代社会で共観福音書伝承を伝達した人々は無文字社会の人々ではなく文字社会の人々であったことも銘記しておかなければならない。

本稿では、社会心理学的視点に着目したアーベルらの口頭伝承の原理を基本的に受け入れるが、しかしこれで共観福音書が文書化される伝承過程の原理が全て説明し尽されるわけではない。まず第一に、Q資料やマルコによる福音書が文書化され、マタイによる福音書やルカによる福音書へと発展していくに伴って、一般的に言って伝承が長くなり複雑になる、というブルトマンやディベリウスの指摘にも一理がある。だが、ブルトマンやディベリウスに対して、それが口頭伝承の過程ではなく文字伝承の過程であることを明確にしておかなければならない。すなわち、原理的に言って、口頭伝承においては伝達内容が短く簡単になる傾向があるのに対して、口頭伝承が文書化されて文字伝承になると、これとは反対に伝達内容が長く複雑になる傾向があるのである。第二に、口頭伝承の伝達過程は一個人が伝達内容を記憶してそれを再現する過程の連鎖で成り立っており、一個人の記憶再現の過程においても、それが文字伝承の記憶再現であれ、口頭伝承と同じ現象（すなわち、平均化、強調、同化）が見られるはずである。第三に、以上に述べた口頭伝承、文字伝承、文字伝承の記憶再現の原理は、共観福音書の伝承史的研究ばかりでなく、新約聖書における旧約聖書の引用・影響関係や、イグナティオス書簡などの使徒教父文書を始めとする教父文書における旧約聖書や新約聖書の引用・影響関係についても適用できると思われる。以下では、アーベルらの社会心理学的視点を取り入れつつも、上に述べた三つの点で、

それを修正し、補足し、拡張した立場に立って、イグナティオスとマタイが明確に重なり合う九箇所について<sup>(22)</sup>、特に平均化、強調、同化という概念を導入して考察したい。

### III

#### (1) エペソ5の2

εἰ γὰρ ἐνὸς καὶ δευτέρου  
προσευχῇ  
τοσαύτην ἰσχὺν ἔχει……

#### マタイ18の19, 20

ἐὰν δύο  
συμφωνήσωσιν ἐξ ὑμῶν  
ἐπὶ τῆς γῆς……  
γενήσεται αὐτοῖς……  
οὐ γὰρ εἰσιν δύο ἢ τρεῖς  
συνηγμένοι εἰς  
τὸ ἐμὸν ὄνομα,  
ἐκεῖ εἰμι ἐν μέσῳ αὐτῶν.

エペソ5の2「一人、二人の祈りがそのような力をもっているならば……」

マタイ18の19, 20「あなたがたのうち二人が地上で心を合わせるならば……それらはかなえられるであろう……二人、三人が私の名によって集まる所には、私も彼らの中にいるからである。」

マタイ18の19, 20の言葉は、正典福音書ではマタイ以外には含まれていない。これと似た思想はオクシリニコス・パピルス1の5とトマスによる福音書語録48にも見られる。しかし、オクシリニコス・パピルス1の5は神々についてであり、それはむしろトマスによる福音書語録30と語録77で構成されたものである<sup>(23)</sup>。また、トマスによる福音書語録48は互いに和解して平和に過すことについて述べたものであって<sup>(24)</sup>、両方とも祈りについて言及したものではない。従って、イグナティオスのエペソ5の2はマタイ18の19, 20と内容的に見て密接に係わるのであって、当時広く流布していたと想定される共観福音書伝承との関連は薄い。

エペソ5の2とマタイ18の19, 20を比較すると、マタイでは「あなたがたのうち二人が地上で心を合わせるならば……」と記されているが、イグナティオスはそれを「一人、二人の祈り」と言葉を多少変えている。これはイグナティオスがマタイとは独立した伝承を用いていることを意味する<sup>(25)</sup>のではない。むしろ、「そのような力をもっているならば」(傍点、引用者)という言葉に示されているように、イグナティオスもその手紙の読者も、マタイ18の19, 20ないしはそれに近い言葉による祈

りの力を知っていることが前提にされているのである。言い換えれば、イグナティオスはマタイ18の19、20の言葉ないしはそれに近い言葉を知りつつ、それらを極めて短かい言葉に圧縮して平均化しているのである。また、イグナティオスの「一人、二人の祈り」という言葉は、マタイの「二人が……心を合わせるならば」と「二、三人が私の名によって集まる所には」が同化して一つになったものとも思われる。さらに、その際に「一人、二人の祈り」と人数を減らしているのは、一人の祈りを強調するイグナティオスの思想的傾向によるのである。イグナティオス書簡では、論敵から教会を守るために一致（*ἐνότης*）と調和（*δύωνοα*）が重要な鍵概念としてしばしば繰り返されているが、その中心となるのは一人の司教（あるいは監督とも訳される）である（例、エペソ4の1）。実際に、イグナティオスは他の箇所でも、一致した「一つの祈り」（マグネシア7の1）を強調している。すなわち、司教を中心とした教会の一つの祈りを強調しているのである。こうして、「一人、二人の祈りがそのような力をもっているならば」と人数を減らすことによって、それに続く言葉である「司教や全教会の祈りはいかに大きな力をもっていることか」、という文章の修辭的効果を高めているのである。

## (2) エペソ6の1

πάντα γὰρ ὃν πέμπει  
ὁ οἰκοδεσπότης  
εἰς ἰδίαν οἰκονομίαν,  
ὡς αὐτὸν ἡμᾶς αὐτὸν  
δέχεσθαι,  
ὡς αὐτὸν τὸν πέμψαντα.

## マタイ10の40 (21の33—46)

ὁ δεχόμενος ὑμᾶς  
ἐμὲ δέχεται,  
(……οἰκοδεσπότης……  
……κληρονομίαν……)  
καὶ ὁ ἐμὲ δεχόμενος  
δέχεται  
τὸν ἀποστείλαντά με.

エペソ6の1「主人が自分の家の管理のために送る全ての人を、私たちは彼を送った人のように受け入れなければならないからである。」

マタイ10の40「あなたがたを受け入れる人は私を受け入れ、私を受け入れる人は私を派遣した方を受け入れるのである。」

マタイ10の40と似た内容の言葉は、ヨハネ13の20とディダケー11の4にも見られる<sup>(26)</sup>。しかし、イグナティオスがマタイと同じ「受け入れる」(*δέχεσθαι*)という動詞を用いているのに対して、ヨハネではそれとは違った同じ意味の動詞(*λαμβάνειν*)が用いられていること、またディダケーでは使徒と主との関係に限定されていることから、イグナティオスのエペソ6の1は、マタイ10の40との関係が最も深く、それが共観福

音書伝承によるのではないと思われる。さらに、これと同じ思想は共観福音書に収められた「ぶどう園と農夫」の譬（マルコ12の1—12、マタイ21の33—46、ルカ20の9—19）にも見られる。しかし、イグナティオスで用いられている「主人」（*οικοδεσπότης*）という言葉がマタイ版にのみ現われ<sup>(27)</sup>、マルコ版とルカ版の同じ譬には用いられていないことから、イグナティオスのエペソ6の1がマタイによる福音書に基づいた言葉であることが一層強められる。

すなわち、エペソ6の1では、マタイ10の40の言葉の上に、極めて圧縮されて要約されたマタイ版の「ぶどう園と農夫」の譬の言葉が重なり合って同化しているのである。その際に、イグナティオスに特徴的な「全て」（*πάντα*）と「しなければならない」（*δεῖ*）という言葉が付け加えられて強調されている。さらに、「ぶどう園と農夫」の譬に見られる「相続財産」（*κληρονομία*）という言葉も、イグナティオスが他の箇所では特有なニュアンスで用いている「家の管理」（*οἰκονομία*）という言葉に変えている。しかし、ここで用いられている「家の管理」（*οἰκονομία*）という言葉のニュアンスが、イグナティオスの神学思想に特徴的な「神の計画」（*οἰκονομία*；しかもイグナティオスの中心的思想である受肉と深く係わるニュアンスで用いられている。エペソ18の2、20の1）という言葉のニュアンスとは異なるからと言って、それらがマタイによる福音書とは独立した資料ないし伝承に由来する<sup>(28)</sup>とは断言できないのである。イグナティオスがここで用いている「家の管理」という言葉は「主人」という言葉と同様に、それぞれ「神の計画」と「神」の隠喩として用いられているからである。こうして、マタイ10の40の言葉をマタイ21の33以下の「ぶどう園と農夫」の譬を平均化した言葉と同化することによって、多義的な意味を増し加えているのである。すなわち、これに続く言葉「それゆえ、司教を主御自身のように尊敬しなければならないのは明らかである」に多義的な含みをもたせているのである。

### (3) エペソ14の2

φανερόν τὸ δένδρον ἀπὸ  
τοῦ καρποῦ αὐτοῦ.

### マタイ12の33

ἐκ γὰρ τοῦ καρποῦ τὸ  
δένδρον γινώσκειται.

エペソ14の2「木はその実から明らかになる。」

マタイ12の33「木はその実から知られるからである。」

マタイ12の33は、ルカ6の44「それぞれの木は自分の実から知られる」<sup>(29)</sup>とほぼ同じ言葉であるが、イグナティオスのエペソ14の2は「そ

れぞれの」(ἐκαστου)「自分の」(ιδίου)という言葉が欠いており、ルカ6の44よりもマタイ12の33の方が近い。同じような言葉は、マタイ7の12「このように、あなたがたはその実から彼らを見分ける」<sup>(30)</sup>にも見られるが、そこでは「その実」が単数形でなく複数形で記されているので、エペソ14の2と同じく単数形で記されているマタイ12の33の方がより近いと思われる。

エペソ14の2は、短い格言であるが、上に述べた他に平行箇所がないので広く流布していたと想定される共観福音書伝承よりもマタイ伝承に由来すると思われる<sup>(31)</sup>。しかし、この箇所も正確な引用でなく、旧約聖書からの引用と同じようにある程度自由に言葉を変え、「知られる」(γνωσκεται)を自ずと「明らかになる」(φανερών)という言葉に置き変えている<sup>(32)</sup>。

#### (4) エペソ17の1

ὁὐὰ τοῦτο μύρου ἔλαβεν  
ἐπὶ τῆς κεφαλῆς αὐτοῦ  
ὁ κύριος

#### マタイ26の7

προσῆλθεν αὐτῷ γυνὴ ἔχουσα  
ἀλάβαστρον μύρου βαρυτίμου  
καὶ κατέχευεν ἐπὶ τῆς κεφαλῆς  
αὐτοῦ ἀνακειμένου.

エペソ17の1「このために、主は頭の上に香油を受けられた。」

マタイ26の7「女が高価な香油の入った壺を持って彼に近寄り、横になっている彼の頭の上に注ぎかけた。」

ナルドの香油の物語は四福音書に見られるが(マルコ14の3—9、マタイ26の6—13、ヨハネ12の1—8；比較、ルカ7の36—38)、エペソ17の1では香油が足にではなく(ルカ7の38、ヨハネ12の3のように)、頭に(マルコ14の3、マタイ26の7のように)塗られている。しかも「彼の頭の上に」(ἐπὶ τῆς κεφαλῆς αὐτοῦ)という語句が正確に対応するのはマタイ版のみである。ここからイグナティオスがマタイによる福音書に基づいて語っていることは明らかである。

エペソ17の1では、ナルドの香油の物語が極めて簡潔な言葉で要約されている。物語的説明が全て省略されているので、イグナティオスもその手紙の読者もこの物語を既に知っていることが前提にされているのである。さらにイグナティオスは、この物語の深い意味を説き明かそうとして、これに続く一文で、「それは教会に朽ちないものを吹き込むためである」、という塗油を洗礼と結びつける、後のシリアのキリスト教で発展する独特な解釈を施して強調している。



(5) **トラレス11の1**

**フィラデルフィア3の1**

*οἱτοι γὰρ οὐκ εἰσιν  
φυτεία πατρός.  
διὰ τὸ μὴ εἶναι αὐτοὺς  
φυτεῖαν πατρός.*

**マタイ15の13**

*πάντα φυτεία ἦν οὐκ  
ἐφύτευεν ὁ πατήρ  
μου ὁ οὐράνιος  
ἐκρῶθησεται.*

トラレス11の1；フィラデルフィア3の1「それらは父の植えたものではないからである。」

マタイ15の13「天の私の父が植えたのではない植えられたものは、全て抜き取られるであろう。」

マタイ15の13と似たような言葉が正典福音書には見られないが、トマスによる福音書語録40に見い出される<sup>(33)</sup>。だが、イグナティオスはマタイと同じ「植えられたもの」(φυτεία)という言葉を用いているが、トマスでは「ぶどうの木」という具体的な名称が用いられているので、広く流布していたとされる共観福音書伝承によるのではなく、マタイ伝承によることが明らかである。

イグナティオスの言葉をマタイの言葉と比較すると、それがかなり単純で短い言葉であることがわかる。それはイグナティオスがマタイによる福音書が書かれる以前のマタイ特殊資料によっており、マタイによる福音書がその後に発展した伝承を記している<sup>(34)</sup>のではなく、イグナティオスがマタイによる福音書ないしはそれに由来する伝承を要約して平均化しているのである。マタイによる福音書が文書として先に成立し、その後約一世代を経てイグナティオス書簡が書かれたのであり、文書の成立順序からして、イグナティオスがマタイによる福音書を要約しているという蓋然性の方が高い。だが、イグナティオスがマタイ以前の伝承を保存している可能性もないわけではないが、先に述べた口頭伝承と文字伝承ならびにその記憶再現の原理から、その可能性は低いと思われる。

(6) **スミルナ1の1**

*βεβαπτισμένον ὑπὸ Ἰωάννου,  
ἵνα πληρωθῇ πάντα  
δικαιοσύνη ὑπ' αὐτοῦ.*

**マタイ3の13、15**

*……πρὸς τὸν Ἰωάννην  
τοῦ βαπτισθῆναι ὑπ' αὐτοῦ.  
……οὕτως γὰρ πρότερον  
ἔσταν ἡμεῖν  
πληρῶσαι πάντα δικαιοσύνην.*

スミルナ1の1「彼はヨハネから洗礼を受けた。それは彼によって全ての義が成就するためである。」

マタイ3の15「彼から洗礼を受けるためにヨハネの所に……このように、全ての義が成就するのは私たちにふさわしいからである。」

イエスの受洗の記事は、四福音書に記されているが（マルコ1の9—11、マタイ3の13—17、ルカ3の21—22；比較、ヨハネ1の29—34）、それが「正しいことを成就する」ためだと述べているのは、マタイが洗礼物語に加えた解釈句であり、他の福音書には見られない。ここから、イグナティオスがマタイ版の洗礼物語ないしはそれに由来する伝承によっていることは極めて明白である。

また、スミルナ1の1とマタイ3の13以下を比較すると、スミルナ1の1以下が原初的な信条を形成する文章となっていることにもよるが、マタイ版の洗礼物語が極めて簡潔に要約されている。洗礼物語の物語的要素が全て省略されているので、イグナティオスもその手紙の読者もその内容を知っていることが前提にされているのである。

### (7) スミルナ6の1

*ὁ χωρῶν χωρέτω.*

スミルナ6の1「受け入れる人は受け入れなさい。」

マタイ19の12「受け入れることができる人は受け入れなさい。」

マタイ19の12の格言と似た内容である「聞く耳のある人は聞きなさい」<sup>(35)</sup>は、マルコ4の9（平行箇所、マタイ13の9、ルカ8の8）、4の23、マタイ11の15、13の43、ルカ14の35、トマスによる福音書語録8、21、24、63、65、96に見られるが、マタイ19の12と同じ言葉ではない。従って、スミルナ6の1は共観福音書伝承というよりは、マタイ伝承によると思われる。

スミルナ6の1とマタイ19の12とを比べると、スミルナ6の1も厳密な意味での正確な引用ではなく、マタイの「することができる」(*δυνάμενος*)という言葉を省いた文章であることが分かる。

### マタイ19の12

*ὁ δυνάμενος χωρεῖν χωρέτω.*

### (8) ポリュカルポス1の2、3

*πάντας βάσταζε,*

*ὡς καὶ σὲ ὁ κύριος……*

*πάντων τὰς νόσους βάσταζε,*

*ὡς τέλειος ἀθλήτης*

### マタイ8の17

*αὐτὸς τὰς ἀσθενείας*

*ἡμῶν ἔλαβεν*

*καὶ τὰς νόσους ἐβάστασεν.*

ポリュカルポス1の2、3「主があなたをも担ってくださるように、全ての人々を担いなさい。……完全な競技者のように、全ての人々の病を担いなさい。」

マタイ8の17「彼は私たちの患いを身に受けて、病を担ってくださった。」

マタイ8の17はイザヤ53の4からの引用である。イグナティオスが旧約聖書から引用する時には、七十人訳聖書から引用することが他の例から明らかであるが<sup>(36)</sup>、七十人訳聖書ではイザヤ53の4は次のように記されている。「彼は私たちの罪を担い、私たちのために痛みを負ってくださった。」<sup>(37)</sup>しかし、七十人訳聖書ではマタイとイグナティオスに共通する「病を担う」(τὰς νόσους βαστάζειν)という語句がない。すなわち、イグナティオスの「病を担う」は、七十人訳聖書によるのではなく、ヘブライ語聖書に基づいたマタイによる福音書に由来するのである。

スミルナ6の1とマタイ8の17を比較すると、マタイの「身に受ける……担う」(λαμβάνειν……βαστάζειν)という表現が、イグナティオスでは「担う……担う」(βαστάζειν……βαστάζειν)と単純化されて重複されている。また、イグナティオスに特徴的な言葉である「全ての」が二度繰り返され、「完全な競技者のように」という禁欲的なイメージを表す特有な語句が挿入されて強調されている。

**(9) ポリュカルポス2の2**

φρόνιμος γίνου  
ὡς ὄφεις ἐν ἄπαισιν  
καὶ ἀκέραιος εἰς ἀεὶ  
ὡς ἡ περικτερά.

**マタイ10の16**

γίνεσθε οὖν φρόνιμοι  
ὡς οἱ ὄφεις  
καὶ ἀκέραιοι  
ὡς αἱ περικτεραί.

ポリュカルポス2の2「全てのことに蛇のように聡く、いつまでも鳩のように素直になりなさい。」

マタイ10の16「だから、蛇のように聡く、鳩のように素直になりなさい。」

マタイ10の16と同じ言葉が、オクシリンコス・パピルス655、トマスによる福音書語録39にも見られる<sup>(38)</sup>。しかし、マタイとイグナティオスにはない「あなたがたは」という言葉が、オクシリンコス・パピルスとトマスには加えられている。上述の諸例を考慮に入れると、ここからもイグナティオスがそれぞれに共通な共観福音書伝承に基づいている<sup>(39)</sup>とは思われないのである。

ポリュカルポス2の2とマタイ10の16とを比較すると、イグナティオスはポリュカルポスというスミルナの司教に宛てて書いているので、マタイによる福音書では複数形で書かれているが、単数形で書いているのである。また、マタイによる福音書では動詞(γίνεσθε)の後に形容詞(φρόνιμοι)が続くが、イグナティオスは形容詞(φρόνιμος)を先行させて、その後に動詞(γίνου)を続けている。この順序の違いは共観福音書伝承やその他の伝承によっているのではなく、動詞よりも形容詞を先行させるイグナティオスの文体的特徴によるのである<sup>(40)</sup>。さらに、イグナティオスはマタイの言葉に「全てのことに」(ἐν ᾧπαντα)と「いつまでも」(ἐκς ἀεί)という特徴的な言葉を挿入して強調している。

#### IV

以上、イグナティオス書簡においてマタイによる福音書と平行する箇所を、平均化、強調、同化という新しい視点を導入して吟味し直した。最後に冒頭の問題に立ち戻ってまとめてみたい。第一に、イグナティオスとマタイが平行する箇所が、共観福音書伝承によるのか、マタイ伝承によるのか、という問題についてである。各例から明らかのように、それらはケスターやショーデルが想定するような共観福音書伝承という広く流布していたとされる共通の口頭伝承によるよりも、マタイによる福音書の言葉と密接に結びついたマタイ伝承に基づいていると思われる。次に、(3)、(4)、(6)のマタイの言葉、ならびに(2)に同化しているマタイ21の33以下の「ぶどう園と農夫」の譬は、マタイばかりでなくマルコヤルカにも平行箇所がある。さらに、(1)、(5)、(7)、(9)にはマタイ以外の共観福音書に平行箇所がないが、それらが短いからと言って、シピンガが考えるようなマタイ以前のマタイ特殊資料によっているのではない。マタイ伝承の口頭伝承か記憶再現によっている為にマタイによる福音書より単純で短いのである。

第二に、イグナティオスとマタイが重複する箇所が、口頭伝承によるのか、文字伝承ならびにその記憶再現によるのか、という問題についてである。イグナティオスがマタイ伝承を述べる時に、マタイによる福音書の言葉が単純になり、短くなり、要約され、圧縮される、という全体的な傾向があることを指摘した。さらに、他の関連箇所との同化、あるいは強調という、口頭伝承や文字伝承の記憶再現で見られる傾向があることを指摘した。併せて、それらが厳密な意味での正確な引用ではなく、文字伝承を写した引用ではないことも明らかである。しかし、それらが

口頭伝承によるのか文字伝承の記憶再現によるのかは、旧約聖書という文書化された文字伝承からの引用がそれほど正確ではないことを考慮に入れると断言し難い。しかし、(6)のマタイによる編集句や(8)のマタイによる旧約聖書からの引用句が残されていることと、口頭伝承では伝達内容とは本質的には関係のない要素が欠落しやすい傾向があることを考え合わせると、イグナティオスがマタイ伝承の口頭伝承によるというよりも、文書化されたマタイによる福音書を読んだ上で記憶を再現している可能性が高いと思われる。このことは、紀元80年代に書かれたと想定されるマタイによる福音書が、シリアの都市、恐らくはアンティオキアに由来する蓋然性が高いことと、イグナティオスが二世紀初頭にアンティオキアの司教であったことを考慮に入れるとなお一層強められるのである。

以上はマタイによる福音書と平行する箇所に関してであるが、この他に共観福音書に関しては、スミルナ3の2とルカ24の39が平行する箇所として挙げるができる。

### スミルナ3の2

λάβετε, ψηλαφήσατέ με  
καὶ ἴδετε,  
ὅτι οὐκ εἰμὶ δαμόνιον  
ἀσώματων.

### ルカ24の39

ψηλαφήσατέ με καὶ ἴδετε,  
ὅτι πνεῦμα σάρκα  
καὶ ὄστέα οὐκ ἔχει  
καθὼς ἐμὲ θεωρεῖτε  
ἔχοντα.

スミルナ3の2「手に取って私に触ってよく見なさい。私は体のない幽霊ではないことを。」

ルカ24の39「私に触ってよく見なさい。霊には肉も骨もないが、あなたがたが見ているように私にはそれがある。」

スミルナ3の2は、仮現論的な思想をもつイグナティオスの論敵に対して語られた言葉であるが、「体のない幽霊」(δαμόνιον ἀσώματων)という語句がどこから由来するのか、古来から論じられてきた。ルカによる福音書をよく知っていた四世紀の教会史家エウセビオスは『教会史』第3巻36章11節で「これらの言葉がどこから由来するか私は知らない」と述べている。アレクサンドリアのオリゲネスは、『諸原理について』第1巻序文8で、それが『ペテロの教え』(『ペテロの宣教』のことか?)によると述べ、ヒエロニムスは、『優れた人々について』2で、それがヘブライ人への福音書に由来すると述べている。このように、「体のな

い幽霊」という言葉には伝承の展開が後の時代にも続いていたと思われるが、恐らくイグナティオスも、この言葉を作り出したのではなく、伝承として継承したのではないと思われる。

スマルナ3の2とルカ24の39を比較するとイグナティオスは、「私に触ってよく見なさい」という言葉を正確に保存しているので、ルカ伝承によっていることは間違いのないと思われる<sup>(41)</sup>。しかし、ルカの後半の言葉を要約して「私は体のない幽霊ではない」という言葉に簡潔に置き変えているのである。イグナティオスがルカ伝承によっていると言っても、それが文書化されたルカによる福音書を読んで記憶を再現しているのか、口頭伝承によるのかは、これだけでは定かではない。しかし、マタイによる福音書と重なる部分がかかなりあるのに対して、ルカによる福音書と重複する箇所がわずか一箇所しかないこと、後の伝承の発展からも予想されるように、復活伝承は文書化された後にもかなり多様な断片的伝承が浮遊していた可能性があることなどから、口頭伝承による可能性の方が高いと思われる。もしそうだとすると、イグナティオスのルカ伝承は先に述べたマタイ伝承と合わせて、「調和福音書」（ハルモニア）という語録集によっているのではないかと考える余地が生じる<sup>(42)</sup>。しかし、先に述べたようにマタイによる福音書と平行する箇所は文字伝承の記憶再現の方が可能性が高いと思われる。それはスマルナ1の1, 2に記されている形成されつつある信条の原初的な形で、処女降誕（!）、ヨハネからの受洗、十字架、復活が述べられており、マタイによる福音書の枠組と一致するので、その存在が前提にされていることによっても強められるからである。

もし以上の論議が正しければ、少なくとも二世紀初頭のアンティオキアを中心としたシリアにおいて、共観福音書伝承という口頭伝承でもなく、マタイ以前のマタイ特殊資料でもなく、「調和福音書」（アルモニア）という語録集でもなく、文書化されたマタイによる福音書、ないしはそれに基づく文字伝承が、既に重要視されて広く用いられていたと思われる<sup>(43)</sup>。こうして、イグナティオスは小アジアの神学的問題を解決するために、パウロやヨハネの神学的思想を継承するばかりでなく<sup>(44)</sup>、シリアのキリスト教的伝統をも生かして用い<sup>(45)</sup>、マタイ伝承をも包括した総合的な立場を築き上げたと思われる。さらに、このような包括的な立場は、イグナティオスからポリュカルポスへ、ポリュカルポスからイレナイオスへと継承されていき、発展していったものと思われる。

## 註

\*本稿は、1990年3月26日に福岡女学院短期大学で開かれた、日本基督教学会九州支部会で発表した原稿を書き改めたものである。席上で質疑して下さった西南学院大学の青野太潮教授をはじめ諸氏に感謝したい。また、Trevett の論文を入手する際に、ダラム大学図書館員の E. Watchman 氏のお世話になった。併せて感謝したい。

1. R. Bultmann, "Ignatius und Paulus," *Studia Paulina in honorem Johannes de Zwann septuagenarii*, Haarlem 1953, 37-51, =E. T. "Ignatius and Paul," *Existence and Faith*, London/Glasgow 1973, 316-329; H. Rathke, *Ignatius von Antiochien und die Paulusbriege* (Text und Untersuchungen 99), Berlin 1967; T. Aono, *Die Entwicklung des paulinischen Gerichtsgedankens bei den Apostolischen Vätern*, Bern / Frankfurt am Main / Las Vegas 1979, 298-364; W. Rebell, "Das Leidensverständnis bei Paulus und Ignatius von Antiochien," *New Testament Studies*, 32 (1986), 457-465.
2. Ch. Maurer, *Ignatius von Antiochien und das Johannesevangelium*, Zurich 1949; H. Koester, "Geschichte und Kultus im Johannes-evangelium und bei Ignatius von Antiochien," *Zeitschrift für Theologie und Kirche*, 54 (1957), 56-69, =E. T. "History and Cult in the Gospel of John and Ignatius," *Journal for Theology and Church*, 1 (1965), 111-123.
3. J. S. Sibinga, "Ignatius and Matthew," *Novum Testamentum*, 8 (1966), 262-283; C. Trevett, "Approaching Matthew from the Second Century: The Under-Used Ignatian Correspondence," *Journal for the Study of the New Testament*, 20 (1984), 59-67.
4. J. B. Lightfoot, *S. Ignatius, S. Polycarp (The Apostolic Fathers Part II)*, vols. 1-3, London 1889, esp. vol. 2; W. R. Inge, "Ignatius," *The New Testament in the Apostolic Fathers*, A Committee of the Oxford Society of Historical Theology (ed.), Oxford 1905, 63-83; W. Bauer, *Die Briefe des Ignatius von Antiochia und der Polykarpbrief* (Handbuch zum Neuen Testament Ergänzungs-Band), Tübingen 1920; B. H. Streeter, *The Four Gospels: A Study of Origins* (1st ed. London 1924) 4th ed. London 1930, 504-507; W. Bauer / H. Paulsen, *Die Briefe des Ignatius von Antiochia und der Polycarpbrief* (Handbuch zum Neuen Testament 18), Tübingen 1985. ただし、パウアーは別の著作で次のようにも述べている, W. Bauer, *Orthodoxy and Heresy in Earliest Christianity*, Philadelphia / London 1971/1972, 211 [= *Rechtgläubigkeit und Ketzerei im ältesten Christentum*, Tübingen 1934, 213], "Rather,

the hypothesis that Ignatius used the gospel of Matthew might seem more appealing; but no really convincing evidence can be adduced even for this.”

5. H. Koester, *Synoptische Überlieferung bei den Apostolischen Vätern* (Text und Untersuchungen 65), Berlin 1957, 24ff.
6. 註3、参照。
7. W. R. Schoedel, *Ignatius of Antioch* (Hermeneia), Philadelphia 1985.
8. B. M. Metzger, *The Canon of the New Testament: Its Origin, Development and Significance*, Oxford 1987, 43–49.
9. 青野太潮、「使徒教父」、荒井献編、『新約聖書正典の成立』、日本基督教団出版局、1988年、55–85、引用は75頁より。
10. 従来から引用関係があると論じられてきた箇所に限って述べ、神学思想的影響については、稿を改めて別の機会に論じたい。尚、二世紀の使徒教父および教父における共観福音書伝承ないしは引用関係に関する最近の研究は、A. J. Bellinzoni, *The Sayings of Jesus in the Writings of Justin Martyr* (Supplements to Novum Testamentum 17), Leiden 1967; C. N. Jefford, *The Sayings of Jesus in the Teaching of the Twelve Apostles* (Supplements to Vigiliae Christianae 11), Leiden 1989, 参照。
11. 註4のバウアーの著作からの引用文、参照。
12. R. Bultmann, *Die Geschichte der synoptischen Tradition* (1Aufl. Göttingen 1921), 2Aufl. Göttingen 1931, =E. T. *History of the Synoptic Tradition*, New York 1968, = 加山宏路訳、『共観福音書伝承史』(ブルトマン著作集 第1, 2巻、新教出版社 1983, 1987)。
13. R. Bultmann, *Die Erforschung der synoptischen Evangelien*, Giessen 1930, =山形孝夫訳、「共観福音書の研究」、『聖書の伝承と様式』、未来社、1967年、所収。引用は30頁より。
14. M. Dibelius, *Die Formgeschichte des Evangeliums*, Tübingen 1919, =E. T. *From Tradition to Gospel*, New York n.d.
15. H. Cadbury, *The Making of Luke—Acts* (1st ed. New York 1927), 2nd ed. London 1961.
16. V. Taylor, *The Formation of the Gospel Tradition* (1st ed. London 1933), 2nd ed. London 1945.
17. H. Riesenfeld, *The Gospel Tradition and Its Beginnings*, London 1957; B. Gerhardsson, *Memory and Manuscript*, Uppsala 1961. R. Riesner, *Jesus als Lehrer*, Tübingen 1981 も同様な考え方を発展させている。
18. J. D. G. Dunn, *Testing the Foundations: Current Trends in New Testament Study* (Durham Inaugural Lecture), Durham 1984, = 拙訳、『新約学の新しい視点』、すぐ書房 1986年、所収、参照。
19. E. L. Abel, “The Psychology of Memory and Rumor Transmission and Their Bearing on Theories of Oral Transmission in Early



- Christianity,” *Journal of Religion*, 51 (1971), 270–281; J. G. Gager, “The Gospels and Jesus: Some Doubts about Method,” *Journal of Religion*, 54 (1974), 244–272; R. B. Williams, “Reflection on the Tradition in the Early Church,” *Encounter*, 40 (1979), 273–285.
20. G. W. Allport & L. J. Postman, *The Psychology of Rumor*, New York 1947, =南博訳、『デマの心理学』、岩波書店 1958年。
21. J. Vansina, *Oral Tradition*, Chicago 1965; 川田順造、『無文字社会の歴史』、岩波書店、1989年。
22. Trevett, “Approaching Matthew,” 62–64 によれば、本稿で考察する九箇所他に、エペソ 6 の 1 = マタイ 21 の 33 以下、エペソ 19 の 1 以下 = マタイ 2 の 2、マグネシア 9 の 2 以下 = マタイ 27 の 52、ローマ 6 の 1 = マタイ 16 の 26、ローマ 9 の 3 = マタイ 10 の 42、フィラデルフィア 2 の 2 = マタイ 7 の 15、フィラデルフィア 3 の 1 = マタイ 13 の 24 以下、フィラデルフィア 6 の 1 = マタイ 23 の 27、フィラデルフィア 7 の 2 = マタイ 16 の 17、以上の九箇所にも平行関係が見られる可能性があることを指摘しているが、本稿ではこれらの箇所やその他の研究者が指摘する箇所に、二語以上が関連する密接な関係を見出すことができなかった。
23. オクシリンコス・パピルス 1 の 5、“[Λέγει] [Ἰ(ησοῦ)ς] δὲ πρὸς ἐάνθρωπον [ἴ]θις [εἰς] ἔστιν μόνος [αὐ]τῷ, ἐγὼ εἰμι μετ’ αὐτοῦ. ἔγειρον τὸν λίθον καὶ ἐθήσασα με, σχίσον τὸ ξύλον, καὶ γὰρ ἐκεῖ εἰμι.” 「イエスは言う。たとえどこに神々がいようととも神々はいる。また、人が自分一人だけにいる所に、私は彼とともにいる。石を起こしてみなさい。そうすればそこに私を見出すであろう。木を割ってみなさい。そうすればそこに私もいる。」比較、トマスによる福音書語録 30、「イエスは言った。三つの神々がいる所に神々はいる。二人または一人がいる所に私は彼とともにいる。」語録 77、「木を割ってみなさい。そうすればそこに私がいる。石を起こしてみなさい。そうすればそこに私を見出すであろう。」
24. トマスによる福音書語録 48、「イエスは言った。二人が同じ家の中で互いに和解するならば、山に向かって移れと言え、それは移るであろう。」
25. Schoedel, *Ignatius*, 55–56 n.11, “It is evident that the reference to one or two in Ignatius reflects a tradition independent of Matthew.”
26. ヨハネ 13 の 20, “ὁ λαμβάνων ἔν τινι πέμψω ἐμὲ λαμβάνει, ὁ δὲ ἐμὲ λαμβάνων λαμβάνει τὸν πέμψαντά με.” 「私を送る者を受け入れる人は私を受け入れ、私を受け入れる人は私を送った方を受け入れるのである。」ディダケ 11 の 4, “πᾶς δὲ ἀπόστολος ἐρχόμενος πρὸς ὑμᾶς δεχθήτω ὡς κύριος.” 「あなたがたの所に来る全ての使徒を主のように受け入れなさい。」
27. Cf. Sibinga, “Ignatius,” 273, “The words ἄνθρωπος ἀκοιδεσπότης in Matth. xxi 33 may well be the result of Mark xii 1 to an

expression current in Matthew's special source.”しかし、「主人」という言葉がマタイによる福音書で七回用いられているうち五回はマルコとルカに用いられないからと言って、シビングが論じるように、それがマタイ特殊資料によるとは断言できない。むしろ、マタイ自身の語法によると思われる。

28. Cf. Schoedel, *Ignatius*, 56 n. 15, “Since the term ‘householder’ (*οικοδεσπότης*) occurs only here in Ignatius and the term ‘stewardship’ (*οικονομία*) only in a different sense elsewhere in the letters (Eph.18:2; 20:1), it is likely that they come from his source.”
29. ルカ6の44, “ἐκαστον γὰρ δένδρον ἐκ τοῦ ἴσου καρπῶ γινώσκειται.”
30. マタイ7の20, “ἄρα γε ἀπὸ τῶν καρπῶν αὐτῶν ἐπιγνώσαθε αὐτοῦς.”
31. Cf. Schoedel, *Ignatius*, 76 n. 8, “Koester (Synoptische Überlieferung, 42–43) draws attention to the proverbial character of the line and the appearance of something like it in b. Ber. 48a (every pumpkin can be told from its stalk”). しかし、バライタ・ベラコート48aの格言は、マタイやイグナティオスの「木」や「実」が「かぼちゃ」と「つる」という具体的な植物のイメージに変わっており、しかも、二世紀末に文書化されたミシュナに収められないで、四、五世紀に文書化されたタルムードに収められた伝承であり、関連性はかなり薄い。
32. Cf. Sibinga, “Ignatius,” 272, “The different expressions are easily accounted for as translations of one Aramaic expression.” シビングは、マタイの「知られる」(*γινώσκειται*)とイグナティオスの「明らかになる」(*φανερὸν*)が違うのは、「知る」というヘブライ語 (*yd'*) が七十人訳聖書がイザヤ64の2, 66の14でそれぞれ上述の二つのギリシア語に訳されていることを根拠にして、マタイ以前の共通の資料が存在し、訳語の違いであると主張するが、根拠が薄いと云わざるを得ない。
33. トマスによる福音書語録40、「ぶどうの木が父から離れて植えられたが、強くならなかった。それは抜き取られて枯れるであろう。」
34. Cf. Sibinga, “Ignatius,” 278–279, “Neither the parallel in the Gospel of Thomas (saying 40) nor Ignatius’ application of the phrase show any sign of ‘Matthew’s’ characteristics, and the exact wording of a common source is a matter of conjecture. Ignatius cannot be said to agree with Matthew against their common source. It is somewhat more likely that he agrees with the source against Matthew.”
35. マルコ4の9, “ὅς ἔχει ὄρα ἀκούειν ἀκούτω.”  
その他の箇所もほとんど同じ言葉で書かれている。
36. エベソ5の3＝箴言3の34, エベソ15の1＝詩篇33の9, マグネシア10の3＝イザヤ66の18, マグネシア12の1＝箴言18の17, マグネシア13の

- 1 = 詩篇 1 の 3, トラレス 8 の 2 = イザヤ 52 の 5。
37. イザヤ 53 の 4 (LXX), “*ὄστος τὰς ἀμαρτίας ἡμῶν φέρει καὶ περὶ ἡμῶν ὀδυνάται.*”
38. オクシリンコス・パピルス 655, “[*ὄμοιος*] δὲ γὰρ [*γενεθε φρόνιμοι ὡς οἱ ὄφεις καὶ ὡς αἱ κέρατοι ὡς αἱ περικτεροί.*]” 「しかし、あなたがたは蛇のように聡く、鳩のように素直になりなさい。」トマスによる福音書語録 39 「しかし、あなたがたは蛇のように聡く、鳩のように素直になりなさい。」
39. Cf. Schoedel, *Ignatius*, 263, “According to the Midrash on the Song of Songs, ‘R. Judah said in the name of R. Simon: God spoke concerning the Israelites: to me be simple as the doves, but to the people of the world sly as the serpents’ (2.14). Another application of the theme is apparently made in Rom 16:19 (‘I want you to be wise as to good, and pure as to evil’). Thus Ignatius is probably in touch with a traditional saying.” しかし、ショーデルが挙げている例は、それぞれ言葉と内容の点で、イグナティオスとマタイが密接に関連するほどには結びついていない。
40. エペソ 4 の 2, “*χορὸς γίνεσθε*”, ポリュカルポス 3 の 2, “*πλέον σπουδαῖος γίνω*”.
41. Ph. Vielhauer, “Judenchristliche Evangelien,” *Neutestamentliche Apokryphen*, E. Hennecke und W. Schneemelcher (Hrg.) 4Aufl. Tübingen 1968, Bd.1, 84, “Die antidoketische Tendenz und die Konkrete Front, in der Ignatius steht, erklären mantle m. E. die Formulierung des Herrenwortes zur Genüge und machen die Annahme einer anderen Quelle als LK. 24, 36ff. unnötig.”
42. 青野太潮、「使徒教父」、69—78 では使徒教父文書、とりわけディダケーと第二クレメンツ書において「調和福音書」(ハルモニア)というイエスの語録集の存在が想定されている。
43. ケスターは、二世紀前半のヒエラポリスの司教であったバピアスの証言(エウセビオス、『教会史』、第3巻39章3—4節)などに基づいて、二世紀半ばまでは、口頭伝承の方が重要で、文章化された福音書は重要視されていなかったという自説(註5、参照)を繰り返している。H. Koester, “From the Kerygma-Gospel to Written Gospels,” *New Testament Studies*, 35 (1989), 361—381, 参照。しかし、二世紀前半の全ての地域で文字伝承よりも口頭伝承の方が重要視されていたとは言えない。少なくとも、アンティオキアを中心としたシリアについては、イグナティオスにおけるマタイ伝承を再評価する必要がある。
44. 註1、2、参照。
45. イグナティオスとシリアのキリスト教および小アジアの神学的問題に関しては、W. A. Meeks & R. L. Wilken, *Jews & Christians in Antioch* (SBL Sources for Biblical Studies 13), Dacatur GA 1978, 19—21; R. Brown & E. Meier, *Antioch & Rome : New Testament*

*Cradles of Catholic Christianity*, New York 1983, 74–81; 拙論、「イグナティオス書簡における“ユダヤ教”とキリスト教——論敵の問題について」、『ベディラヴィウム』第28号（1988）、18–32.

**後記** 本稿のテーマに関して、二世紀におけるマタイによる福音書の影響力を論じた次の著書も重要であると思われるが、脱稿する時点までに入手できず、本稿では考察の対象から外したことをお断わりしたい。E. Massaux, *Influence of the Gospel of Saint Matthew on Christian Literature before Saint Irenaeus: First Ecclesiastical Writers*, Macon GA 1991.